

第7回国際アビリンピック(ホームページ作成) 競技取材記



大阪センター（関西職業能力開発促進センター） 小田 泰久

1. はじめに

2007年11月14日から17日まで静岡市のツインメッセ静岡にて第7回国際アビリンピックが開催され、職業技能競技26種目の中で「ホームページ作成」競技の取材をいたしました。同競技は大会開会式翌日の11月15日に実施され、世界12カ国から15名の選手が参加し、日本からは3名の方が出場しました。代表者3名は、平成16年、17年、18年度各全国障害者技能競技大会での同競技種目金賞受賞者です。

2. 競技内容と審査基準

競技課題は各国内アビリンピックで実施されたものなどを参考に、組織委員会が専門家に委嘱して作成されます。今大会は「国際アビリンピック大会を紹介するページ」の作成でした。与えられた素材、決められた形式・技術を入れながら、3時間という決められた時間内で作成し、時間的な余裕があれば普段培ってきた技術を付け加え、より閲覧しやすいホームページに仕上がっているかどうかを総合的に評価します。具体的には以下6課題です。

表 競技課題一覧

課題1	スタイルシート作成	課題2	メインページ作成
課題3	リストページ作成	課題4	トップページ作成
課題5	競技概要ページ作成	課題6	ご意見・ご感想ページ作成
その他	完成させた紹介サイトを元に、独自の改良版を作成する		

これらの競技内容はすべてパソコンのみで行い、使用するツールはAdobe社DreamWeaverが主です。

評価ポイントとしては4点あります。まず1点目として「技術力」です。ここではJavaScript、スタイルシートやHTMLの高いレベルでの利用があるかどうかを評価します。2点目として「独創性」です。ここでは他の人と異なるユニークな発想があるかどうかを評価します。3点目として「芸術性」です。ここでは人を惹きつけるデザインになっているかどうかの評価をします。そして最後に4点目として「ユーザビリティ・アクセシビリティ」です。ここでは障害者を含め多くの人々にとって使いやすいページになっているかどうかを評価します。

採点は当該分野に関して十分な知識、経験を有し、技能競技などで審査経験がある審査員の採点結果の

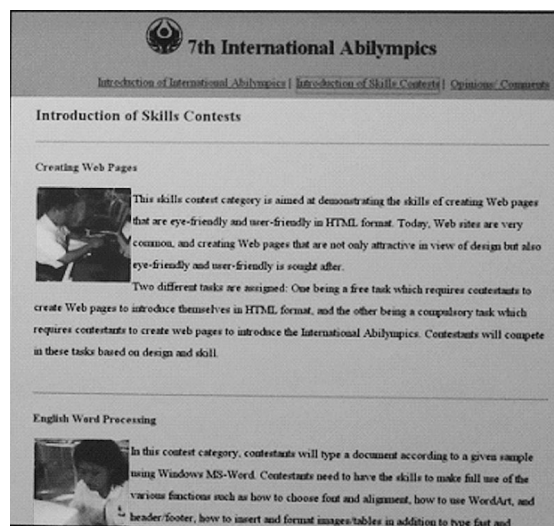


写真1 作成ページ例



写真2 競技スペース

合計点にて決定されます。その結果、優秀な結果を修めた順に金賞、銀賞、銅賞が授与されます。また、障害の種類や程度に応じて、審査員が特に認める場合には特別賞を授与することもあります。

3. 競技の様子

競技開始30分前の午前9時には、15名の競技者は20メートル四方で区切られた競技スペースの中で、指定された座席に着き、競技開始の準備をしていました。ある選手は目を閉じて気持ちを落ち着け、またある選手はキーボード補助器の確認、またある選手はルール上、競技開始後の引率者との会話が禁止されていることから、競技に関する最終確認など、これから始まる3時間の競技開始までの時間をおのおののやり方で過ごしていました。

午前9時30分、監督者の合図で競技が開始され、競技者は課題冊子とディスプレイとに真剣な眼差し



写真3 競技の様子

を向け、競技スペースは静まり返った雰囲気になりました。1時間、2時間と時間が経過するなかで、納得した表情で課題冊子の次ページを捲る競技者や、与えられたテーマや形式、評価ポイントに合致しているかどうかを確認しながら、少し不安な表情を浮かべながら時計を確認する競技者などさまざまでしたが、競技者たちの課題にかける真剣さがダイレクトに伝わってきました。

途中、大会名誉総裁であられる皇太子様のご視察など競技者には心強い励ましもあり、3時間の競技が終了しました。

4. インタビュー

競技終了後、競技者の1人である大阪府出身の藤田孝子さんにインタビューすることができました。

藤田さんは昨年度全国障害者技能競技大会の金賞受賞者であり、地区予選や検定試験などで雇用・能力開発機構大阪センターポリテクセンター関西を何度か利用されたとのことで、笑顔を交えながら気軽にお話が聞けました。

質問事項の抜粋として、今大会にどのようなお気持ちで臨みましたか、という質問をしたところ「10年かかりやっと国際大会に出場できましたので、とにかく全力を尽くそうと思いました。」というお答えでした。また、競技課題に関しては特に注意した点は何ですか、という質問に対しては「海外の競技者は鮮やかな色彩を多用している方もいたようですが、私は視覚障害者に配慮した黒、グレーを主に使いました。」という答えが返ってきました。

5. 競技結果とまとめ

競技結果は金賞を中国、銀賞を韓国、銅賞を中国が獲得しましたが、佐賀市在住の寺田義孝さんが審査員の特別賞を受賞しました。

今大会において参加者の競技に対する熱い思いを身近に感じ、職業能力開発に携わる一員として技能・技術に対する尊さ、大切さ、すばらしさを再確認して業務に当たるべきであると感じました。